【58】

氏名（本籍）	小松英雄（こまつひでお）（東京都）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第24号
学位授与年月日	昭和54年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	『日本声調史論考』
主査	筑波大学教授　文学博士　馬淵和夫
副査	筑波大学教授　文学博士　牛島徳次
副査	筑波大学教授　文学博士　伊藤博

論文の要旨

本論文は，日本語の声調および清濁に関する歴史的研究を目的としている。資料とした文献の範囲は，おおよそ11世紀から16世紀にかけての，声点を付した文献が中心となっている。全体は下のように構成されている。

序　章　日本声調史の領域設定

第Ⅰ部　声点の分布とその機能

第Ⅱ部　日本声調史の諸問題

以下，順を追って，それぞれの要旨を説明する。

序章　日本声調史の領域設定

11世紀に入ると，音節の高低抑揚を標示する方法として，中国語の声調体系に基づく声点が導入され，やがて，単点と複点とによる清・濁の標示へと移行する。すなわち，声調と清濁とが不可分のものとして標示されるようになるのである。このような現象を生じるのは，いったい，いかなる理由によるのかということが，この章での主題である。本書においては，声調と清濁とが，日本語において同一レヴェルのものとして認識されていたことを，いくつかの論拠から明らかにし，これら2つの要因が総合的に研究されなければならないとして，「日本声調史」という新たな概念を導入している。

参考論文

アクセントの変遷（岩波講座『日本語』5）

第一部　声点の分布とその機能

声点とは声調および清濁の標示であるというだけの単純な認識のもとに，従来，アクセント史の資料として，また，清濁判別のための根拠として利用されてきた。しかし，平仮名・片仮名には元来付加されていなかったこれら2つの要因が，いかなる理由によって11世紀頃より明示されるようになったのかについての説明は，なされていない。この第一部においては，

三巻本『色葉字類抄』（前田家蔵）

図書寮本『類聚名義抄』（宮内庁書陵部蔵）

観智院本『類聚名義抄』（天理図書館蔵）

文明本『節用集』（国立国会図書館蔵）

などにおける声点の具体的な分布を調査，分析し，その結果に基いて，声点がどのような機能をになっているかを明らかにしようとしている。次にあげる諸点は，新見に属するところである。

1．字書や音義の和訓は文脈に支持されることがないので，語の同定のために声点による声調および清濁の標示がきわめて有効であったこと。

2．証拠や師説のある信憑性の高い和訓に対して声点が加えられること。

3．声点が発達して以後に書写・編纂されたものの中には，最初から加点することを前提にして墨書の部分が記されているものがあり，そのような文献においては，声点が単なる付加的な要素でなく，本文の一部と見なされるべきこと。

4．声調と無関係に濁音仮名を卓立して標示するために，事実上のあき間であったところの去声点の位置が利用され，それが現在の濁音標示の源流となっていること。

5．濁音仮名にすべて濁点が加えられるようになったのは，ずっとあとの時期のことであって，その過渡期に圏点による不濁点が用いられていること。

第二部　日本声調史の諸問題

日本語の音節についての高低抑揚の把握は漢字音のそれの投影であり，それらは一体として把握されなければならないという基本的立場に基づき，いろいろな角度からの考察を行っている。

第1章から第3章までは，図書寮本『類聚名義抄』を資料として，平安時代末期に，正音と呼ばれる字音体系がいかなる具体的様相を呈していたかを調査したものである。一般には漢音と呉音という2つの対立する字音体系が共存していて，相互に規則的な対応関係を持っていたというように考えられているが，この当時の正音というのは，頭子音および韻の部分が，ともに仮名ではとうてい転写できないほどに中国原音に近いものであった。それに対して，和音の方は，ほとんど仮名で忠実に表わしうるほどに日本化したものであったと考えてよい。声調における八声などというのは，単に声調識別が詳しいわけではなく，それに応じて，漢字音そのものが複雑だったのである。

第4章　和訓のかなにほどこされた≪平声軽≫の声点

図書寮本『類聚名義抄』の和訓の仮名に施された声点を分類してみると，平声の点よりやや上方にもう一種の点が付せられていることが判明した。検討の結果，この声点は平声軽であり，従来，理論的にその存在が推定されながら実在を証明できなかったところの下降調音節を標示しているこ

とが明らかになった。その分布はかなり広いが，

形容詞終止形および連体形語尾

サ変動詞終止形

に，特に規則的にあらわれているのが特徴である。この文献と観智院本類聚名義抄の声点との比較により，この文献に加点された当時，下降調音節は高平調音節に移行しつつあったらしいこともわかる。

第5章　平安末期畿内方言の語調体系

承暦3年（1079）抄本『金光明最勝王経音義』の和訓には，字の左隅のやや右下と，左側の上隅と，左側の中間とに3種の声点が施されており，左側の中間の点は，やはり平声軽である。この文献の加点は非常に正確であり，また，時期的に見て，下降調から高平調への移行が起こる直前のものと考えられる。図書寮本『類聚名義抄』とこの文献とを資料として得られる下降調についての情報を導入し，平安末期畿内方言の語調体系の再構をみたのが本章である。たとえば，二音節名詞は下記の如くであったと推定される。

◍◍　　箱
※◍◓　　溝
◓◍　　蛇
◍○　　橋
※◓○　　虹
◓○　　脛　はぎ
○○　　腕
○◍　　舟
※○◓　　虻

これらのうち，※印を付した3種は，従来その存在が知られていなかったものである。「ニジ」の〔◓○〕型は，過去の文献資料および現代諸方言に見える3モーラの語形との関連づけにおいて支持され，また，〔○◍〕型と〔○◓〕との区別が古く存在したという従来の仮説も，実際に証明することができた。

所属する語が文証の上からは「ミゾ」という一語しか指摘できなかった〔◍◓〕（上東）型については，その実在を裏付ける理論的根拠を示し，おおかたの支持を得たものの，一人の研究者によって，その後，執拗に否定され，他の研究者をも交えて長期にわたり議論がくり返された。下記の2つの参考論文は，その問題に関するものである。

上東型名詞存在の理論的根拠（『文学』1974年5月）

上東型名詞存否論の帰結（『国語学』1977年6月）

この章については，平安末期から現代京都方言にいたる語調体系の変遷についても考察を加えている。

第6章　日本字音における入声音の諸問題

『金光明最勝王経音義』『大般若経字抄』図書寮本『類聚名義抄』などを資料として，入声にかかわるいくつかの問題を取り扱ったものである。ここにおいて明らかにした，字音の範疇としての唇内入声音のあり方は，日本字音史に関する１つの重要な問題提起になりうると考えられる。また，日本語の促音が，タ行音の前で，舌内入声音と同様の音としてとらえられ，それが「ツ表記」に移行していった過程を跡付けたことも有意義な論考である。

第７章　阿米都千から以呂波へ

従来，「手習詞歌」として位置づけられてきた「阿米都千」「大為尓」「以呂波」を，漢字音の声調習得と結び付けて考えようとした論文である。

参考論文

≪大為尓歌≫（『国語学』1973年12月）

この論文は本章における考察への補いで，≪大為尓歌≫の原形にア行，ヤ行のエが併存した可能性を想定したものである。

第８章　３巻本『色葉字類抄』における「ヲ」「オ」の分布とその分析

この文献における「ヲ」「オ」の仮名の書き分けは，従来の説のように，定家仮名遣における「ヲ」「オ」の書き分け，すなわち，アクセントの高低によって書きわけると同一原理に基づいているのではなく，あくまでもこの辞書の構成に即して工夫された原理であり，「遠」「於」両部への項目配分の基準，ないし，検索にあたって，所与の語句の収載されている部を見分けるためのめやすに止まるものであるとする。

審　査　の　要　旨

これを要するに，本論文は，平安時代以降の諸資料に付せられた声点の機能を詳しく分析して，

１．小松氏が20年前に発見した「平声軽」の声点とその声調を導入して平安時代末期の京都地方の国語アクセント体系を新しく再構するとともに，

２．それらの声点の機能は，アクセントおよび清濁を表示することによって語の同異の認定のはたらきをなしていたことを明らかにし，

３．アクセント表示が次第にその意義を失うとともに濁音表示の方が語の同異の認定に重きをしめるようになり，やがて濁点を仮名に加えるようになったこと

を綿密に論証したものである。その資料の取扱いおよび解釈については，日本・中国の言語学の見地からしていずれも正確・妥当なものである。ただし，論の中心を平安時代に置いたため，中世以降における声点・声符の関連する諸問題についてはやや手薄の感じがあり，今後の研究の進展する方向が今１つ明確でないことに，不満の感じは残るが，これらは現在の国語学界では未踏の分野であり，今後氏の犀利な考察力をもって解明されることが期待されるところである。ともかく本論文はその目的とするところを十分に解明し，国語史上の新分野を開拓して，その所説はすでに学界の

承認を得ていると認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。